



愛荘町歴史文化資料集 第34集

令和3年度秋季特別展

祭りの刺繍

－見送幕と職人の手仕事－



ごあいさつ

滋賀県では春祭りを盛大に行なう地域が多く、華やかに装飾した曳山が巡行する様子を各地で見ることができます。愛荘町・軽野神社（堅井之大宮）の春季大祭でも近隣の集落氏子により九基の曳山が出て町内を巡行します。この曳山の背面に飾られる見送幕には、虎や孔雀・獅子などが刺繍によって描かれ、祭りを絢爛豪華に彩ります。

本展覧会では堅井之大宮春季大祭で用いられる見送幕や近江の見送幕を中心に展示し、あわせて祭りの様子を解説いたします。また、修理した屋台幕と修理に用いた道具類を展示し、勇壮な祭りを飾る美しい刺繍ができるまでの様子と、その裏で活躍する刺繍職人達の仕事を紹介いたします。

令和三年一〇月

愛荘町立歴史文化博物館

目次

一	堅井之大宮春季大祭	3
二	彦根繡と刺繡の修復	19
三	祭りの紹介	31
	津島秋まつり	31
	府八幡宮例大祭	33
	「秋季特別展開催によせて」 坂上町屋台保存委員会 会長 小栗眞	36
四	その他列品資料	37
五	列品一覧	38

凡例

- 一、本図録は令和三年一〇月三日（土）から二月二日（日）までを会期として愛荘町立歴史文化博物館において開催した令和三年度秋季特別展「祭りの刺繡・見送幕と職人の手仕事」の展示作品図録である。
- 一、展覧会の企画・構成・図録の編集は愛荘町立歴史文化博物館学芸員 西連寺匠が行い、同学芸員 三井義勝・山本剛史が補佐した。
- 一、本書は展示資料のすべてを掲載したものではない。
- 一、本図録掲載の写真について、9～10頁、20頁下段、27頁下段、30頁、37頁については当館学芸員西連寺が撮影し、それ以外の記載のないものについては辻村耕司氏（辻村写真事務所）が撮影した。また、32頁～36頁の写真については巻末に記す各位の提供を受けた。
- 一、所蔵について、個人蔵のものについては記載を省略した。
- 一、本展開催にあたり、展示資料を出陳いただいた所蔵者のほか、各位の協力を得た。巻末に記して謝意を表します。

一 堅井之大宮春季大祭

祭りで、曳山が堅井之大宮周辺を巡行するのが特徴である。本展
 覧で展示した見送幕もその曳山の背面を飾るためのもの
 堅井之大宮春季大祭での各字の様子を紹介する。

大宮春季大祭は四月中旬に旧秦荘地区の氏子集落によって行な
 られる。本展は、曳山が堅井之大宮周辺を巡行するのが特徴である。本展
 覧で展示した見送幕もその曳山の背面を飾るためのもの
 堅井之大宮春季大祭での各字の様子を紹介する。

現在は四月中旬の休日に合わせて行なわれている。

夕方であり、ホンビでは見送幕をはじめ、花や提灯などで飾ら
 れる。宮入りをこなす。二〇二〇年から本年にかけては、新型コロナ
 ス感染症対策のため春季大祭は開催され
 たり直近の例を話者に伺った。

子園は「渡り光」という、年番制
 子と一組
 順で
 社のお
 松尾
 子園は「渡り光」という、年番制
 子と一組
 順で
 社のお
 松尾
 子園は「渡り光」という、年番制
 子と一組
 順で
 社のお
 松尾

内に建てられたため、芸山の上での演芸はなくなった。

堅井之大宮春季大祭はヨミヤ（宵宮）とホンビ（本日）に分かれる。三〇年ほど前までは四月一九日にヨミヤ、二〇日にホンビをしていたが、

②宮世話会

宮
 世話会と呼ばれるが、地域によっては誠徳会（松尾寺）・敬神会（常
 安
 ・若衆（西出・斧磨・竹原）とも呼ばれる。

世話会は各字の氏子、一三歳（元服）から三〇代前半
 と
 いる。年長者の中でも代表者となる数名はカシラと呼ば
 の
 坪にあ

る
 歌に参加
 として
 世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

世話会
 同様に
 の
 の
 な
 相

(3) 堅井之大宮春季大祭

①ヨミヤ（宵宮）

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

②ホンビ

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

境
 内に
 長が
 ミヤ
 加者
 主体
 止す
 加と
 昭和
 宮世
 会
 太

の辻は「宮下の辻（森下の辻）」と呼ばれ、そこに各字の曳山と芸山が

集り、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つため、かなりの速度で宮下の辻を曲がることになる。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

つており、また出発時間や宮人の順番でもめることもある。宮入では曳山を走

(4) 堅井之大宮春季大祭の近世

は現在とは様子が大きく異なっていた。江戸時代

享保二二（一七三六）に記された、担ぐ村々が明壽

輪寺の子院宛てた文書では、坂（尾寺）・東出村・

（岩倉）・釜西出村・円城寺（尾寺）で記されており、当

六カ字で祭行なっていた。また、神輿は明壽

ていること、天王之神輿・十禅神輿

の三基が存在する。神輿の調査した際、

神輿や祭の集落の祭の日に、神輿三社が

「湯の華」は湯立神事をさす。これに据えた釜で湯を

巫女などの者が笹の葉で湯を自身や参りに振り掛ける儀

である。当時の祭礼ではこの釜が三台据えられていたのである

五年（一六六五）の記録では東出村字林久川のうち、三五歩を

るよう申し付けている。「湯の華」に用いられる燃料などを、この田地

曳山

本

の得分から賄われていたのである。現在でも当番字が字内の田地の一部を神饌田として管理し、収穫した米を堅井之大宮に供えており、近世から

に獅子舞は見られないが、近隣の祭礼の例から推察するに行列の中
 につけて練り歩いていたと考えられる
 祭については二社は「卯の鳥」、一社が「擬帽」とあ
 祭の装飾であると考えられる。また、擬帽は擬宝珠である
 一の作
 方 総高 五寸
 担 中の長さ 丈二
 も より小
 祭の渡
 ま 岩倉の
 が かれた
 の 江戸
 ま 宮入
 ら 宮入
 ら 宮入
 ら 宮入

祭礼の運営の中心となる宮世話は東出村にしか許されなかつたといわれ

ている。特に祭礼の雰囲気を高める重要な仕事である堅井之大宮の二ヶ
 所に祭りの幟を立てる役目は、宮世話である東出村にしか許されない役
 の集落に年番制で配分されるようになった。このような各村が
 格で祭りに参加する雰囲気は、曳山の華やかさを競う現在の祭
 となつてい
 九つ
 な資
 前提





曳山巡行の浮子（東出）



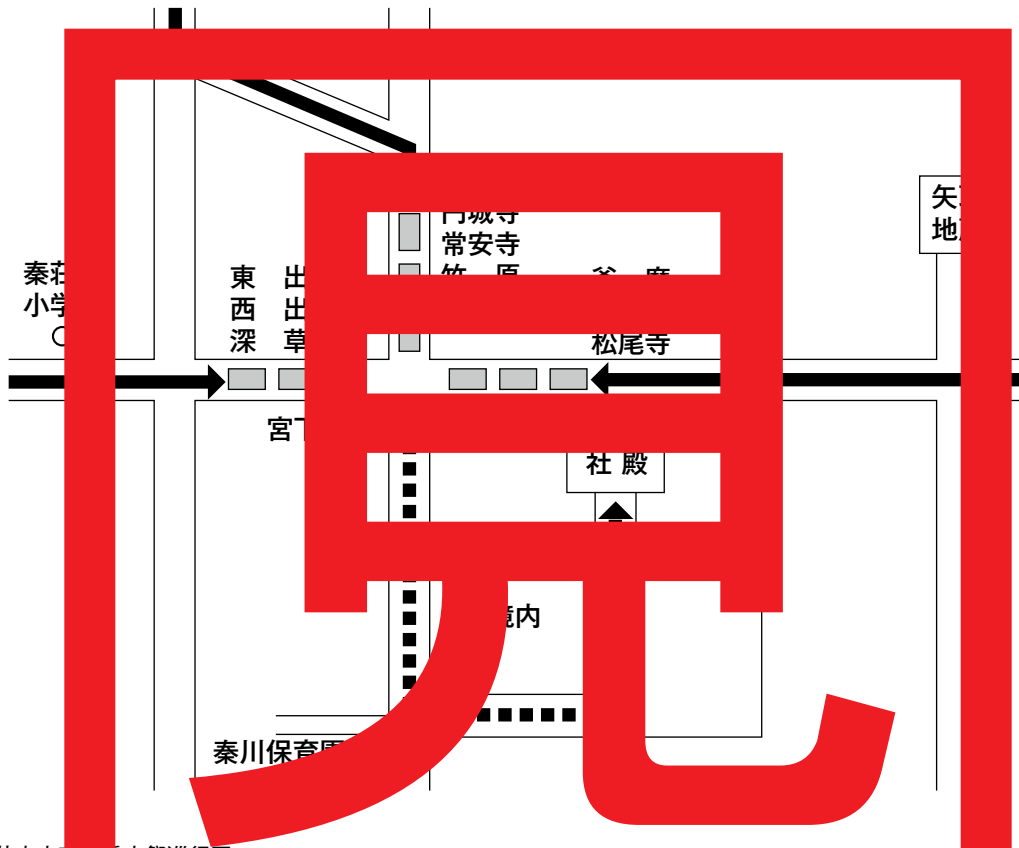
芸山（東出）



金幣扱の様子



境内曳き回しの様子



堅井之大祭 春季大祭巡行図



宮下の辻



堅井之宮 (拝殿)



昭和十五年（1940年）開催の堅井之大宮例大祭記念写真（深草） / 個人蔵

溪谷に双

愛荘町深草 / 昭和33年 / 現行
縦200cm 横107cm

収納箱の書により昭和33年
の入谷刺子店によって製作さ
かる。新地に遠山・岩・
部・立木を濡れ描きし、
て下書きあと、平織にて色はかし繡を
施してい



桜に孔

愛荘町深草 / 年代不明 / 旧

×横127

溪谷に獅子

愛荘町 月城寺 / 大正12年

縦210cm × 横178cm

獅子(ライオン)を刺繍

遠山・岩・水を大まかに

る。内箱の墨書から大

れ、本伝吉氏によって

分か

描きしてい

された事が



溪谷に獅子

岩倉 / 昭和時代 / 現行

縦210cm × 横142cm

遠山・岩・水を大まかに描き、獅子(ライオン)を中心とした動物を刺繍表現している。

波、岩、竹、唐獅子

愛荘町岩倉／明治末期／旧幕
縦203cm 横135.5cm

黒ビロウ地に波・岩・竹を
し、唐獅子は平織であらわし
ラスをはき込むなど、他の見
なる表現技法が用いられて
下部には「兵田Ⓞ小林呉服店謹表」と製
作元が示されている。



見



竹林に双虎

愛荘町岩倉／制作年代不明／旧幕
縦209cm × 横153cm

大字岩倉の見送幕は祭りに使用
幕と波岩の雲山に使用する
告されている。本展覧会に係
る3枚の見送幕の存
かとなった。大字岩倉の中
川が流れ、南北に民家が分布し
ことから、かつて字の南北両方の
見送幕が出されていたのではな
察される。

現行
が報
査で
明ら
岩倉
るこ
から
と推

松に鷹、波、海鳥

愛荘 松尾寺（北）／大正13年／現行幕

縦240cm × 横156cm

波や鷹、鷹など全体を刺繍であらわし

てい、一部近年の補修

の間、調査で大正13年に製作さ

事が明らかとなっている。



深谷に牡丹獅子

愛荘 松尾寺（南）／大正13年／現行幕

縦240cm × 横151cm

獅子や牡丹などを刺繍

で表現している。当集落の西里乃氏

により大正13年に製作された

竹林に吠

愛荘町常安寺／昭和35年／現
縦213cm 横141cm

大まかな墨で描きの上に刺繍して竹林の
生い茂る谷で吼える虎の
る。過去聞き取り調査で昭和35年に愛
れた事が明らかになっている。



子持ち鶴
愛荘町常安寺／大正末期／旧幕
縦188cm 横132cm

松の枝に巣をつくり子持ち鶴を絵
。常安寺にあり、小林静
作として伝えられ、大正末期から
真の作品であると推定される。

あら
の製
初期

富士の 山水図
愛荘町西出／大正5年／現行
縦190cm×横126.5cm

愛荘町見送幕では他に、
図で、水・山・立木などを濡れ描き
し、空・遠景などを刺繍で仕上げている。内箱の黒書
によれば、大正5年に製作された。愛荘町西出の
郎・秀次郎・寅次郎氏らに、寄贈された事が分かる。



竹林に双虎

愛荘町西出／昭和4年／現行
縦190cm×横155cm

空・遠景などを刺繍で仕上げ、刺繍
によって制作された。愛荘町西出の郎・秀次郎・寅次郎氏らに、寄贈された事が分かる。
取り調査で昭和4年の製作であると判明
した。

山岳に双

愛荘町糸 / 昭和39年 / 現行
縦230cm 横165cm

遠山・岩を濡れ描きし、
て色をはし、一部に金の刺
収納箱の書によって昭和3
あること分かる。



見



双虎
愛荘町糸 / 大正4年 / 旧幕
縦228cm 横152cm

に羊毛 谷川・
虎を刺繍している。取り調 大正
4年のものと判明した。

本

渦巻雲 双龍

愛荘町竹原／昭和30年頃

縦219cm × 横159cm

卷雲はまかに濡れ描き、刺繍を施し

ていて聞き取り調査で昭和30年頃に額

布が掛けられたことが判

刺繍は大正期のものと推測

れる。



松に孔雀

愛荘町竹原／明治末期／旧嘉

縦158.5cm × 横158.5cm

刺繍で写実的な孔雀を表現している。製

作年は不明であるが、収納箱に墨書され

た寄贈者の名前から明治後期から大正期

にかけての作品であると推測される。

二 彦根繡と刺繡の修復

青木刺繡の歴史

彦根市に工房を持つ青木刺繡は、明治中頃に愛知郡蚊野村の青木八右衛門が創業した。当時、彦根周辺では京都から商人が訪れたが、産業としては定着せず、その多くが廃業していた。青木八右衛門は、刺繡の技術の継承と発展を目指し、刺繡の専門家を呼ぶよう努めた。明治三十七年には、青木八右衛門が創業した。当時、彦根周辺では京都から商人が訪れたが、産業としては定着せず、その多くが廃業していた。青木八右衛門は、刺繡の技術の継承と発展を目指し、刺繡の専門家を呼ぶよう努めた。

賞を受賞している

明治三十七年にはアメリカで開催されたセントルイス万国博覧会に刺繡を出品している。明治三十六年には第五回内国博覧会で三等賞を受賞している。明治三十七年にはアメリカで開催されたセントルイス万国博覧会に刺繡を出品している。明治三十六年には第五回内国博覧会で三等賞を受賞している。

またこの頃、八右衛門は貿易刺繡の更なる発展を目指して数多くの博覧会に刺繡を出品している。明治三十六年には第五回内国博覧会で三等賞を受賞している。

伝統工芸品の指定を受け、呉服のほかにも祭礼で使用する幕などの刺繡を製作するとともに、その高い技術を活かして修復なども請け負っている。



セントルイス万国博覧会賞状（メダル）明治37年（1904）／青木刺繍業



青木刺繍工房外観

(2) 刺繍の修復

行 金 の だ や ① 工 高 り 見 態 あ る
 修復作業に入る。



② 刺繍の修復

使用も考え 若干太い糸を使用している。元の縫い糸と同じ色
 だが、今回のように縫い糸の太さが変わり、糸の密度が変わる
 にみた時に 縫い付けていく。 縫い付けていく。 縫い付けていく。

金糸も、 金糸と古い金糸が若干異なる。古い刺
 の金糸で修 ると新旧の糸が出てしまうため、青木
 廃棄となる や修復時 糸の色 古色があり状態の
 は解体して 刺繍の修 再利用している。

③その他の 幕上部の帯は、 柄の布に取り替えるこ
 退色が激しい内側部分から元の 調べ、似た色の織
 た。退色の っては糸の染色から特注 ともあるという
 する。場合 修復では、 古布の上か
 布を縫い付けた。

また、帯部分の金具については、彦根市の金物屋に修理を依頼す
 山車



決まっているため、元の金具と同じように修理・換装する必要がある。

以上のような工程を経て津島市麩屋町の屋台幕が修復された。納品された屋台幕は比較的近年に製作された作品である。しかし、長く祭りで使用されることを考えて修復された本品は、麩屋町で末永く受け継がれ、その目を楽しませていくであろう。

④ 林の新調
 和元年度 静岡 田市
 八幡宮 祭で れる山
 の周囲を 飾る
 成三〇〇 使用 幕は昭
 以来大切 受け継 三年に製作されたもの
 断れ、同 案の剥 見ら 八〇
 ら 案につ するこ 専門 困難と判
 な したこ 幕の縁を追加することなど、現代の祭りの様相に合うように作さ
 れ

へ変更したほか、金糸を縫い付ける場所に金色のシルクスクリーンを下

地として塗布し、刺繍の色が映えるよう工夫を施している。また、太くても縫い糸の色が目立たない、青木刺繍が独自開発した糸を使用して頑

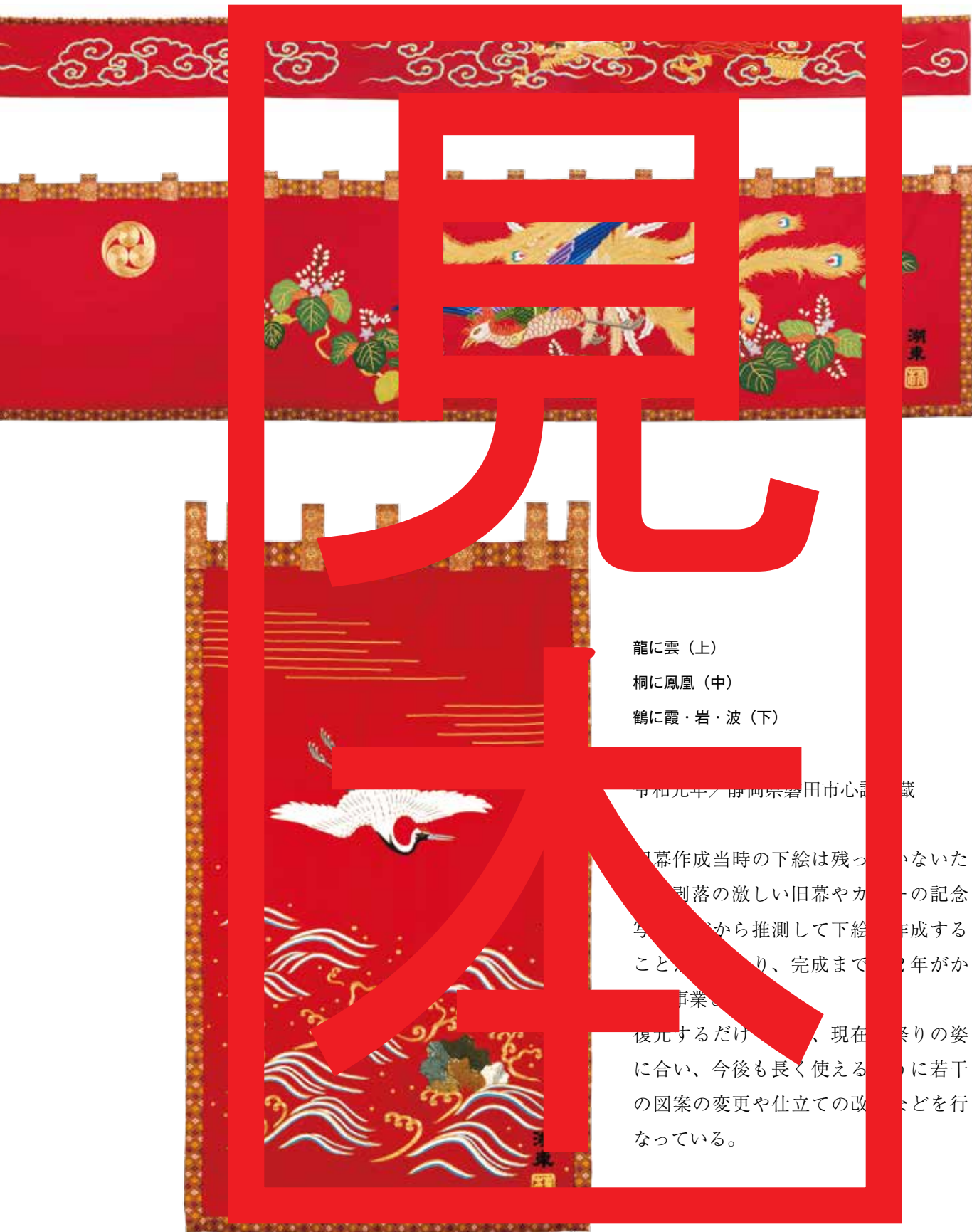
た。これらの屋台幕新調事業は平成二九年から始まり、細かい調整を令和元年度に完成。同時に露目され、同年一〇月八幡宮例大祭並びに奉祝記念で

本

●旧幕

●新幕





龍に雲（上）

桐に鳳凰（中）

鶴に霞・岩・波（下）

昭和九年／静岡県静岡市心斎橋

旧幕作成当時の下絵は残っていない
剥落の激しい旧幕やカビの記念
写真等から推測して下絵を作成する
ことになり、完成までに2年がか
事業として
復元するだけ、現在の幕の姿
に合い、今後も長く使えるように若干
の図案の変更や仕立ての改良などを行
なっている。





刺繍の
坂上
がは
完し
また
技術

の下絵職人が下絵を起こして、縫製したものをもとに刺繍を製する。
刺繍については下絵が存在しない、100%参考の下絵を作成した。刺繍
失われた場所があるが、右対称であったため、残っている部分で互いを補
絵を描いている。
絵は図案と色指定のみで、刺繍は縫製の流れ、縫製方法などは職人の
せられ

見



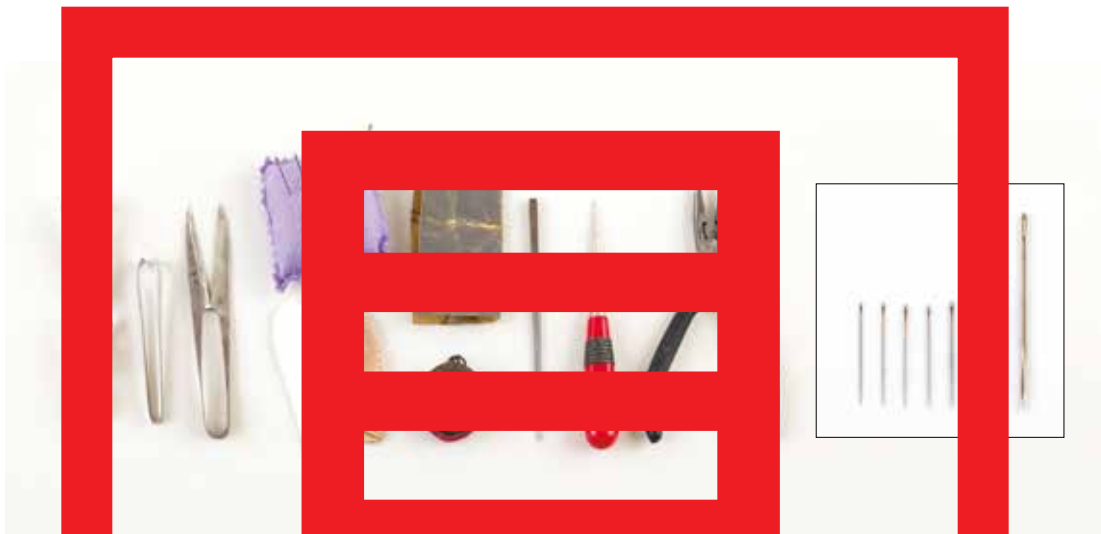
束

本



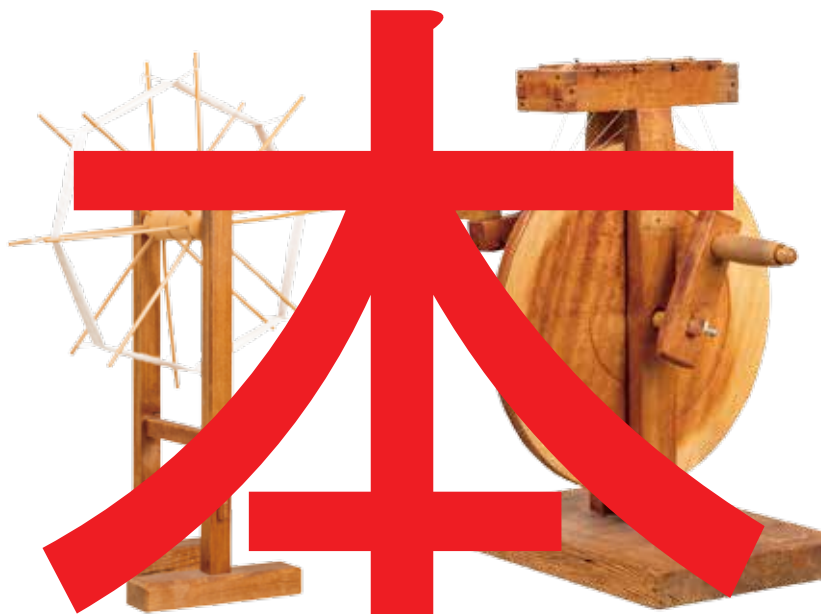
職人の手

熟練の職人は30年以上青木刺繍に勤めている。一方一つひとつは勉強すればでき、多種多様な刺繍の技法を覚え、作品・作風にあわせて縫うことができるようになるには数年かかる。



刺繍職の仕事道具

針は洋用のメリケン針と和裁用の日本針の数種類があり、用途によって使い分ける。和針は打ちのめられたものを使用する。洋針は穴が小さく、通した糸が針とともに糸を通るため縫い目に穴が空きにくい。日本針は針先が緩やかで、糸の抵抗が少なく軽く針が通るといわれる。和裁用の道具は使いやすい。洋裁用の道具もいる。



御光台(左)・糸縫り機(右)

刺繍を作る際に使用する道具。縫る前の糸を御光台にかけ、刺繍に必要な分量を取り分ける。その後、糸縫り機にかけて刺繍糸を作る。縫ったばかりの糸は縫りが戻りやすいため、木枠に巻いて糸に慣らし糸を締める。刺繍の作業終了後は、糸を巻いた状態で使用する。



縫りを掛ける前の糸（左）と縫った糸（右）

糸を縫うときの力加減や使う糸の本数を調節するだけで糸の絡み方が変わる。一本での縫い方の違いも些細に見えるが、刺繍として糸が重なり合うと同じ色でも色が全く違うように見える。

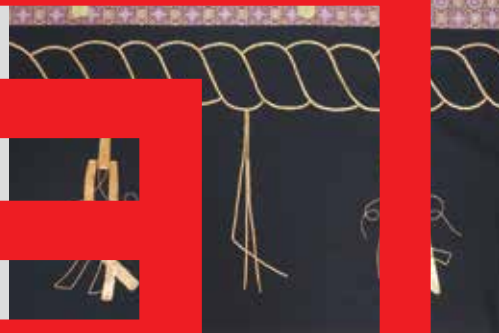
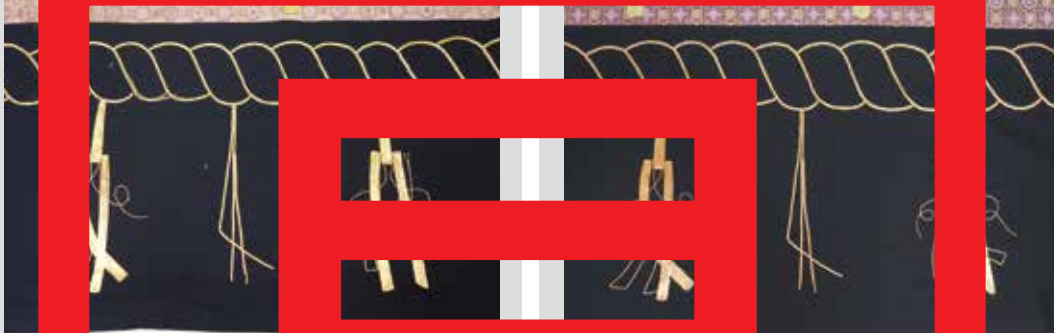


金糸の色合いの新しい金糸（上）と古い金糸（下）

金糸が古くなったときの自然な色合いは、人の手で再現する事が難しい。このため古くなった刺繍や貴重な刺繍から丁寧にはずして保管しておき、古色を帯びた刺繍を修復する、周囲の風合いに馴染ませるために用いる。

●修復前

●修復後



金糸が留めている糸が傷み、刺繍が外れかかっている。

もとの金糸を残し、少し太い糸で留める



帯が激しく退色し、傷みも見える。また

もとの帯の上から被せるように新しい帯を縫った、金具も鍍金を行い、新品同様の姿になった。

見本

麩屋町山車



れた。山車の上には「湯取神子」からくりが設置され、4体の人形が5～6人で採り舞って神子舞を演じる。大幕は猩々色で前幕には金刺繍の「麩屋町」が刺繍された幕が掛けられる。山車中には前述した「湯取神子」の御神子が御座り、大幕が掛けられて



車切の... 山車... 度も同じ揚所で回転するため、道路には定と車輪の溝がけのきりと残る。毎年道路を修復するほかに、近年では板を敷くようになった。車輪の跡に注目し、きれいに回れているかを見ていくことも祭りの楽しみ方のひとつであるという。

府八幡宮例大祭

府八幡宮

府八幡宮は静岡県磐田市中央に鎮座する神社で、誉田別命、足仲彦命、市比売命の三柱を祀る。社伝では天平期の創建とされ、境内に祀られた八幡宮であることから「府八幡宮」といわれる。境内には八幡像と女神像が伝

（） 古代から所々で祀られていたが、社で最も古くは推定できる

府八幡

大祭

府八幡宮例大祭は祭一週間、浜坂（はまざか）の海岸に砂を積んで、砂御幣を立て、大祭の安全を祈願する。また、近年で、この時に神輿の巡行が行われ、神職と氏子が行い、穢れを祓うと

八幡宮例大祭は一〇月第一土・日曜日の二日間執り行われ、日

話係と呼ばれる若衆が朝から府八幡宮に集まり、山車の巡行を

決定する。また、この日には例祭が行われる。本殿東側・祓場にお

子は浦安の舞を奉納して泰平を願う。夕方頃になると神輿が各町内を巡



府八幡宮

行しながら、八幡宮へ向かい、午後八時頃、と社殿の明かして消し、真つ暗な中で神を神輿に移す儀式を行なう。

二日目には神輿の巡行が行なわれる。神輿の行列には、砂まき

砂を撒いて道を作り、その上を神輿が通る。

正午になると神輿の巡行に先立ち命魚奉献の儀が行なわれる。国司（淡海国玉神社詞）が神前に生きた魚を献じ、それを東参道の斎場の水

場

から神事が行われた後、御祭神を神輿に奉遷し氏子町内を巡行する。神輿が巡行する際は通行人が手を合わせるなど厳かな巡行となるの

に

、山車は余興の役割があり、賑やかに曳かれるのを

山

二〇の町から出るため、祭りの間は磐田市中泉の各所で

山

を見る

流

と汲む

ひ

とこ

山

が曳き廻

光

の屋台の

屋

と見に行

近

の様子

心誠社

の屋台幕の所蔵機関でもある坂上町心誠社は明治九年

より独立し結成された。結成時の資料は現在ほぼ失われて

の山車は山車前面彫刻裏側に棟梁や彫刻家の名前と共に明治三五年

あるため、已修があったが、古い山車があったことが指摘されて

元

いる。その後、三六年近く使用され昭和一三年に山車の新築に伴い、別

き

地域に譲られた。新築された山車も市内の名工によって建造され、彫刻

渡って愛された山車も使用によって傷みが生じ、小規模の修復

きたが、令和元年に大規模改修を行った。

本展覧会

男女問わず

をみると浜

習俗を連綿

信仰がある

に

のあたり、磐田市中泉

の人々が祭りへの思

など古くからの神

け継ぐことが

である

の、地域住民の府八幡宮

である

方々に話を伺う

心にと語っていた

が、こ

を

を

を

を

を

を

を

本



山車巡行の様子

坂上町心

幅 90cm

高さ 66cm

奥行き

建造年 13年

唐破風の白木造りで、市内の大工によって製作されている。また、各所に彫られた大村善太郎の彫刻も見所がある。

平成13年（令和元年）に修理を行い、電気式の照明をアセチレンランプに変更しており、昔ながらの祭りの風情を残しながら現代を受け継いでいる。



見



本

祭礼の様子



坂上町屋台保存委員会

眞

● 町との

〇一七年
 から愛
 立歴史
 館の
 特別展
 同した
 素晴
 私達
 誠社の山車
 示へと

● 八幡宮例大祭と心誠社

両県磐田市に鎮座する府八幡宮は天平年間に遠江国の国司と
 工（天武天皇の曾孫といわれている）が、国府の守護として勧請し
 前日の金曜日には前夜祭も行なわれます。榎門横の装設舞台で一氏子町

による手古舞奉納」が行われます。また氏子による「手踊り」「浦安の舞」
 なども披露されます。前夜祭から氏子二〇町により豪華な山車がにぎや

我が町坂上町・心誠社は、明治九年に独立・結成されました
 菅原道真公の道歌「心だに誠の道にかな、なば祈らずとても
 む」に由来す。現在の山車は、昭和に建造した磐田
 なる二層式風屋台です。令和三年に修復を行い幕も青木
 により復元しました。鬼板正の鬼退治を代表と
 八三点の彫やガス灯も見

● 最後に

改めて一祭
 た。再認識
 新型コロナ
 を府八幡宮
 言により寒
 しの再開を
 皆さんにご覧
 き、大変うれしく光栄に思っています。是非多くの皆様にご覧
 祭りの力
 女性を地域の仲間と
 の両立をいかに実
 ました。残念ながら緊
 きませんでしたが、ま
 きは、三年振りの山
 。そして、新調
 幕も
 ただ
 だけ



太鼓打ちの物 (松尾寺) / 当館蔵

平糸台 / 青木刺織



博覧会賞状・メダル / 明治43年 (1910) / 青木刺織



日英博覧会賞状・メダル / 明治43年 (1910) / 青木刺織蔵

五 列品一覧

番号	資料名	地域	制作年代	所蔵	縦(cm)	横(cm)	会期
1	溪谷に双虎（現行幕）	愛荘町深草	昭和33年	深草自治会	200	107	後期
2	桜に孔雀文様見送り（旧幕）	愛荘町深草	不明	深草自治会	177	127.7	前期
3	溪谷に双獅子（現行幕）	愛荘町円城寺	大正12年	円城寺自治会	239	178	前期
4	溪谷に獅子（現行幕）	愛荘町岩倉	昭和時代	岩倉自治会	238	142	後期
5	波、岩、竹に唐獅子（旧幕）	愛荘町岩倉	明治末期	岩倉自治会	203	135.5	前期
6	竹林に双虎（旧幕）	愛荘町岩倉	不明	岩倉自治会	209	153	後期
7	溪谷に牡丹獅子（現行幕）	愛荘町松尾寺南	大正13年	松尾寺南自治会	226	151	後期
8	松に鷹、岩、波、海鳥（現行幕）	愛荘町松尾寺北	大正13年	松尾寺北自治会	240	156	前期
9	竹林に吠虎（現行幕）	愛荘町常安寺	昭和35年	常安寺自治会	213	141	後期
10	松に子持鶴（旧幕）	愛荘町常安寺	大正末期	常安寺自治会	188	132	前期
11	富士に舟、山水図（現行幕）	愛荘町東出	大正5年	東出自治会	196	126.5	後期
12	竹林に双虎（現行幕）	愛荘町西出	昭和4年	西出自治会	228	155	前期
13	山岳に双虎（現行幕）	愛荘町斧磨	昭和39年	斧磨自治会	230	165	前期
14	竹林に双虎（旧幕）	愛荘町斧磨	大正4年頃	斧磨自治会	228	152	後期
15	渦巻き雲に双龍（現行幕）	愛荘町竹原	昭和30年頃	竹原自治会	219	159	前期
16	松に孔雀（旧幕）	愛荘町竹原	明治末期	竹原自治会	203	158.5	後期
17	大宮祭禮定法之事	-	嘉永2年	東出自治会	-	-	通期
18	堅井之大宮祭礼覚	-	享保21年	軽野神社	-	-	通期
19	龍に雲（現行幕）	磐田市坂上町	令和元年	坂上町心誠社	31.8	757.5	通期
20	桐に鳳凰（現行幕）	磐田市坂上町	令和元年	坂上町心誠社	84.5	707	通期
21	鶴に霞・岩・波（現行幕）	磐田市坂上町	令和元年	坂上町心誠社	200.3	110.8	通期
22	桐に鳳凰（旧幕）	磐田市坂上町	昭和13年	坂上町心誠社	84	700	通期
23	注連縄に御幣（現行幕）	津島市麩屋町	不明	津島山車保存会	-	-	通期
24	注連縄に御幣（旧幕）	津島市麩屋町	安政2年	津島山車保存会	-	-	通期
25	天幕下絵	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
26	刺繍道具	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
27	金糸	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
28	刺繍糸	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
29	刺繍糸（縫り）	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
30	御光台	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
31	糸縫機	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
32	刺繍台	-	現代	青木刺繍	-	-	通期
33	セントルイス万国博覧会賞状	-	明治37年	青木刺繍	-	-	通期
34	セントルイス万国博覧会金メダル	-	明治37年	青木刺繍	-	-	通期
35	イギリス万国博覧会賞状	-	明治43年	青木刺繍	-	-	通期
36	イギリス万国博覧会金メダル	-	明治43年	青木刺繍	-	-	通期

※前期：10月23日（土）～11月21日（日） 後期：11月22日（月）～12月12日（日）

話者・協力者(敬称略・順不同)

軽野神社(堅井之大宮) 神主 中村泰昌

深草自治会・宮世話会

円城寺自治会・宮世話会

岩倉自治会・宮世話会

松尾寺自治会・松尾寺誠徳会

常安寺自治会・常安寺敬神会

東出自治会・東出若衆

西出自治会・西出若衆

斧磨自治会・宮世話会

竹原自治会・宮世話会

西澤清

津島市麴屋町山車保存会

津島市役所

津島市観光交流センター

坂上町屋台保存委員会

坂上町心誠社

坂上町自治会

府八幡宮

有限会社青木刺繍

写真提供者(敬称略・順不同)

小栗眞

松原裕志

林誠三郎

田中忠夫

上田喜江

【参考文献】

秦荘町歴史文化資料館編・刊『堅井之大宮見送幕展』一九九五年

府八幡宮著・刊『府八幡宮ものがたり』二〇〇七年

愛荘町教育委員会文化振興課編・刊『愛荘町民俗調査報告書 第二輯 郷とムラの春祭り』二〇〇八年

秦荘町史編集委員会編・刊『秦荘の歴史 第4巻 資料』二〇〇九年

愛荘町立歴史文化博物館編・刊『平成二十四年度夏期特別展 美の造形・描かれた刺繍』二〇一二年

黒田剛司・横井誠著『津島の山車祭 歴史と祭礼文化』二〇一三年

愛荘町立歴史文化博物館編・刊『平成二十九年夏期特別展 湖東の刺繍・明治に華開いた刺繍絵画』二〇一七年

津島山車保存会・津島石採祭車保存会編・刊『津島秋まつり 山車祭と石採祭』二〇一九年

坂上町屋台保存委員会編・刊『坂上町心誠社山車改修記念誌』二〇二二年

松原史著『刺繍の近代 輸出刺繍の日欧交流史』思文閣出版 二〇二二年

令和三年度秋季特別展

祭りの刺繍

「見送幕と職人の手仕事」

令和三年（二〇二一）一〇月

シリーズ名／愛荘町歴史文化資料集 第三四集
編集・発行／愛荘町立歴史文化博物館

☎五二九―一二〇二

滋賀県愛知郡愛荘町松尾寺八七八

☎〇七四九（三七）四五〇〇

印刷／近江印刷株式会社

©2021 愛荘町立歴史文化博物館

【印刷情報】

材質／本紙：ニューVマット 90kg

文字／本文：モリサワ書体 リユミン Pr6N

キャプション：モリサワ書体 ゴシック MB101Pro R

ノンブル／小塚明朝 Pr6N R

インク／大日本インキフュージョン G-ST

令和三年度秋季特別展
祭りの刺繍 -見送幕と職人の手仕事-
令和3年
10.23 - 12.12
●10.23 - 11.21 ●11.22 - 12.12
10時 - 17時（入館は17時30分まで）

料 金 注1/外へ公開日 平日11月以降は観覧無料
入 館 料 注2/一般300円(250円)・小・中学生150円(100円)※（障がい者割引は別途要）
無料入館日(令和3年11月28日(土)～29日(月・祝))

特 集 展 示 注3/有子舞子刺繍、豊田半紙土心刺繍、津島山車舞子
障がい者支援 見送幕刺繍展覧

協 賛 国(100円)・滋賀県知事(100円) 県(100円) 県民文化振興課 県立歴史文化博物館 津島山車舞子
滋賀県知事(100円) 中江町(100円) 中江町歴史文化館 中江町歴史文化館

愛荘町立歴史文化博物館



愛莊町立歴史文化博物館
Aisho-cho Historical Museum

